

理念の現前への問い ——フッサール論を中心とした初期ジャック・デリダの思想形成の研究

亀井 大輔

本論文の課題は、ジャック・デリダによるエトムント・フッサールについての解釈を総体的に理解することによって、初期デリダの思想形成を明らかにすることである。

デリダとフッサールとの関係については、とりわけ『声と現象』(1967)におけるデリダのフッサールへの批判がこれまでも議論の的となってきた。周知のとおり、デリダは『声と現象』において、フッサール現象学に独自の解釈を行っており、それは一般に、「現前の形而上学」批判として理解されている。しかし、『声と現象』が引き起こしたさまざまな反響とは裏腹に、デリダのフッサール論の意味が十分に捉えられたことはこれまでなかったように思われる。本論文が試みるのは、デリダの修士論文『フッサール哲学における発生の問題』(1953-54)から出発し、デビュー作『幾何学の起源・序説』(1962)を経て、『声と現象』にまで至る、デリダのフッサール論について、それぞれの著作をできるかぎり明確に意味づけ、それらの関係を捉えることによって、そのフッサール解釈を総体的に描き出すことである。

本論文の議論によって明らかになるのは、次の二点である。第一に、デリダのフッサール論に一貫する問題は「理念の問題」である。それは『発生の問題』において、「カント的意味での理念」「目的論的理念」の直観(現前)可能性の議論としてすでに登場し、『幾何学の起源・序説』では歴史における「無限の理念」の問題として議論の全体において問われた。『声と現象』では、それまでの議論を活用しながら、「理念性」の可能性の条件としての「カント的意味での理念」の現前が問われたのである。以上の問題を<理念の現前への問い>と呼ぶことができる。

第二に、デリダのフッサール解釈は三つの段階に整理することができ、第一段階は<弁証法>、第二段階は<超越論的歴史性>、第三段階は<現前の形而上学>という語で、その特徴を表すことができる。デリダは修士論文以降、以上の三つの段階の変遷を経てフッサールを解釈することによって、初期思想の特徴を示す「現前の形而上学」論を形成したのである。